

15 京都の私塾

きょうとのしじゅく

知る

私塾とは

ここでいう私塾とは、主に江戸時代、民間の有識者によって開設された教育機関のことをいいます。私塾は幕府や藩の統制を受けることなく塾主によって独自に経営され、その自宅を教場として用い、学問や文芸を門人に教授しました。

近世庶民の教育機関としては寺子屋がありますが、寺子屋が主に子供を対象として読み・書き・算盤程度の内容を教えたのに対し、私塾ではより高度な学問や文芸をあつかいました。内容は儒学を対象とする漢学塾が最も一般的でしたが、ほかに和学や蘭学・洋学、また医学・神道・詩文など多彩な私塾があり、剣術・馬術など武芸を教授するところもありました。

京都の私塾の歴史

私塾の歴史は江戸時代初期に始まります。長い文化的伝統を持つていた京都でも、江戸時代を通して多くの私塾が栄えました。京都の私塾としては、十七世紀前半、日本近世朱子学の祖藤原惺窩に学んだ松永尺五が開いた春秋館や講習堂が早いものです。

特にこの講習堂と、十七世紀後半に伊藤仁斎が開いた古義堂とは、明治時代にいたるまで二百数十年もの間、子孫によ

って代々受け継がれました。天保十三（一八四二）年には、両塾は京都の私塾の代表として幕府から表彰されています。また江戸時代中期以降には、蘭学の導入や医学の発達、和学の高揚などもあってさまざまな私塾が開設されました。

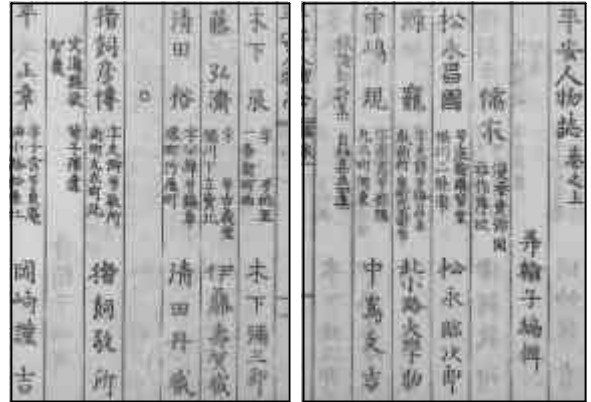
しかしその一方、江戸中期頃になると江戸の発展により京都の文化的な優位は揺らぎ始め、幕府直轄の昌平坂学問所の設置や藩校の急増、また地方私塾の成長などにより、京都の私塾は次第に衰退していききました。さらに明治時代には公的な教育制度が本格的に整備されるようになり、私塾の時代もやがて終りを迎えることになりました。

遊学案内書の刊行

江戸中期の儒学者江村北海によれば、

凡ソ諸国ヨリ京学々々トテ京都へ来リ学ブ生徒、来ルアリ帰ルアリ、来去常ナシトイヘドモ、大抵一年二幾百ヲ以テ数フベシ（『授業編』天明元（一七八一）年序）
 といい、当時は地方から毎年数百人もの生徒が修学のために上洛していたことがわかります。

京都での手づるを持たずに遊学してくる人々にとって、どの学者に入門すべきかという手引き書となったのが『平安人物志』です。その初版凡例には「此の編の作、他邦の人、京師に遊学する者の為に輯む」とあって、本文には京都に居住する文化人の姓名・字号・住所・俗称などが紹介されています。



『平安人物志』(天保9年版)
右に講習堂、左には古義堂の名が見えます。

という役割が衰えると、入門案内というより京都の文化人名鑑という意味を持つようになったといわれています。
なお、こうした入門案内の類似書として、京都で開業する医師の姓名や門流、および内科・外科などの担当科を列挙した『良医名鑑』『天保医鑑』『洛医人名録』などがあります。これらはまた、患者が名医を求めるための資料としても利用されました。

歩く／見る

江戸時代の京都の主要な私塾

(開塾年代が不明の場合は開塾者の生没年を()で示した)

塾名	開塾者	所在地	開塾年代
春秋館	松永尺五	西洞院通二条下る	一六二八〜

同書は何度も版を改めて内容を刷新しており、
・明和四(一七六七)年
・安永四(一七七五)年
・天明二(一七八二)年
・文化十(一八一三)年
・文政五(一八二二)年
・文政十三(一八三〇)年
・天保九(一八三八)年
・嘉永五(一八五二)年
・慶応三(一八六七)年
の計九版を数えました。
ただし京都の学問の中心

講習堂	生白堂	雉塾	錦陌講堂	望楠軒	古義堂	京都学館	観自在堂	弘道館	遵古堂
松永尺五	菅得庵	木下順庵	山崎階齋	若林強齋	伊藤仁齋	堀景山	服部蘇門	皆川淇園	猪飼敬所
東堀川通二条下る東側		東山	高倉通錦小路西入	堺町通二条下る杉屋町西(のち東側)	東堀川通下立売上る東側	室町通綾小路西	千本通上長者町東入	中立売通室町西入る南側	堺町通竹屋町南
一六三七〜一八八九		(一六二二〜一六九八)	(一六五二〜一七二二)	一七二二〜幕末	一六六二〜一九〇五	一六七四〜	一七六八〜	一八〇六〜	(一七六一〜一八四五)
									富小路通夷川上る
									一八世紀後半

和学	医学
北辺塾	学館医学院
審神舎	究理堂
釋舎	蓼莪堂
報本学舎	順正書院
富土谷御杖	新宮涼庭
正親町(現中立売通)北辺	南禅寺草川町
一八〇四〜	一八三九〜明治頃
富土谷御杖	伊良子道牛
五条坊門(現仏光寺通)	畑黄山
室町通錦小路西	烏丸通四条下る
一八一七〜	一七八二〜八八
城戸千楯	小石元俊
室町通錦小路西	釜座通竹屋町下る
一八一六〜一九世紀前半	(一七四三〜一八〇八)
大国隆正	吉雄元吉
一八四一〜	一八〇〇〜

(『京都府の教育史』附表をもとに作成)

松永昌三講習堂跡 中京区東堀川通二条下る東側

松永昌三(一五九二—一六五七)は尺五と号し、父は歌人として名高い貞徳です。尺五は藤原惺窩(一五六一—一六一九)に師事し、寛永五(一六二八)年に漢学塾春秋館を開き、寛永十四(一六三七)年、この地に京都所司代板倉重宗の援助で講習堂を開塾しました。この翌年には後水尾上皇より自筆の扁額を下賜されており、また後光明天皇からは堺町御門前の土地を下賜され、尺五堂を建てています。尺五の門弟は五千名にもおよんだといわれ、講習堂は松永家が代々継承して明治時代にいたりしました。現在、その跡にあたる地に石標が建てられています。



講習堂扁額(京都国立博物館蔵)

なお、松永昌三の墓は妙恵会総墓所(下京区柿本町)にあります。

山崎闇齋邸跡 上京区葎屋町通下立売上る東側

山崎闇齋(一六一八—一八二二)は、はじめ京都で仏門に入りましたが、儒学者野中兼山の眼に止まって土佐へ移り、同じ儒学者の谷時中に師事して儒学を学びました。やがて帰京した後、明暦元(一六五五)年には自宅で講席を開きました。現在、その跡にあたる地に石標が建てられています。

闇齋は江戸に遊学して会津藩主保科正之らの知遇を得るなど精力的に活動し、晩年には神道へ関心を寄せて、儒学と神道を合一した垂加神道を唱えたことでも知られています。

なお、闇齋の墓は金戒光明寺(左京区黒谷町)にあり、下御霊神社(中京区寺町通丸太町下る)には闇齋を祀った垂加社があります。

あります。

伊藤仁齋古義堂跡 上京区東堀川通下立売上る東側

伊藤仁齋(一六二七—一七〇五)は京都の商家に生まれ、歌人里村紹巴の孫を母として、豪商角倉家とも縁戚関係にあった人物です。

仁齋は朱子学を学びましたが、後に批判的となり、本来の孔子の教えに戻るべく古義学派(堀川学派)を創始して、寛文二(一六六二)年、当地の自宅に古義堂を開きました。古義堂には公家・武家・町人にわたる多数の門弟が訪れて隆盛を見せ、松永家の講習堂と並ぶ京都の私塾の代表的存在となっており、伊藤家が代々継承して明治時代にいたりしました。ちなみに、この地は山崎闇齋の私塾と堀川を挟んだ向かい側にあたります。



古義堂は、天明八(一七八八)年の天明の大火をはじめ幾度も火災に見舞われ、現存する建物は明治二十七(一八九四)年に再建されたものですが、二階建土蔵造の書庫は仁齋時代のもものが現存しています(国指定史跡)。現在、塾跡と邸宅を示す石標が建てられており、仁齋ら歴代の当主が遺した著作や蔵書は、天理図書館に古義堂文庫として収められています。

なお、仁齋の墓は二尊院(右京区嵯峨二尊院門前長神町)にあります。

堀景山邸跡 下京区綾小路通室町西入る

堀景山(一六八八〜一七五七)は儒学者堀杏山の曾孫で、幼少から父玄達に学んで儒医となりました。景山はこの地に居宅をかまえながら、安芸国広島藩主浅野吉長に招かれてたびたび進講しました。また国学者本居宣長(一七三〇〜一八〇一)も、宝暦二(一七五二)年から同四年まで、景山のもとへ寄宿して儒学を学んでいます。

なお、景山の墓は南禅寺塔頭帰雲院(左京区南禅寺福地町)にあります。

皆川淇園弘道館跡 上京区中立売通室町西入る南側

皆川淇園(一七三四〜一八〇七)は医者皆川春洞を父とし、和学者として知られる富士谷成章(御杖の父)は弟にあたります。淇園は特別な師を持たず、ほとんど独学で独自の学問を打ち立て、晩年の文化三(一八〇六)年、自宅に弘道館を開きました。現在、その跡にあたる地に石標が建てられています。

また淇園は肥前国平戸藩主松浦静山をはじめ諸藩の礼遇を受けたほか、画家円山応挙らとも親交を結び、詩文・書画にも秀でていたことで知られています。

なお、淇園の墓は阿弥陀寺(上京区寺町通今出川上る)にあり、その墓碑銘は松浦静山の撰文になります。

香川景樹邸跡 左京区岡崎東福ノ川町

香川景樹(一七六八〜一八四三)は因幡国鳥取藩士の子に生まれましたが、歌道での立身をはかって上洛し、歌人の小沢蘆庵や香川景柄に和歌を学びました。

景樹は歌壇二条派の宗家であった香川家梅月堂の養子に迎

えられました。後に離縁されて独立し、明治時代まで歌壇の主流となる桂園派を創始しました。享和三(一八〇三)年には岡崎に住居を移し、その後ここは桂園と呼ばれて桂園派の拠点となりました。

なお、景樹の墓は聞名寺(左京区東大路通仁王門上る)にあります。

新宮 凉庭順正書院跡 左京区南禅寺草川町(料亭順正)

新宮凉庭(一七八七〜一八五四)は丹後国由良(京都府宮津市)の医家に生まれ、伯父に医学を学んだ後、長崎へ遊学して西洋医学を修養しました。やがて帰郷の後、文政二(一八一九)年には京都で開業、京都随一の流行医となりました。天保十(一八三九)年、凉庭は私財を投じ、当地に医学兼図書館の順正書院を設立して、内外科ほか八学科を定めて体系的な医学・儒学教育を行いました。

この順正書院は明治時代にいたるまで維持され、現在は料亭順正として当時の遺構がほぼ残されているほか、玄関には京都所司代問部詮勝の筆になる「順正書院」の額がかげられています。

なお、凉庭の墓は南禅寺塔頭天授庵(左京区南禅寺福地町)にあります。



江戸時代の順正書院(『東山名勝図会』巻一)